

じょうこうじ

掟光寺だより

令和6年
3月号

行事案内

● 3月10日(日)
「雪囲いはずし」
8時00分から

● 3月11日(月)
「涅槃会・日蓮聖人ご降誕会」
13時30分から

● 3月20日(祝)
「春彼岸会」
13時30分から



● 3月30日(土)
「千部会準備・掃除」
8時00分から

● 3月31日(日)
「千部会・布施餓鬼会」
9時30分から



仏教説話

強欲なお金持ちの話

昔、仏が世におでましになったころ、天竺の舍衛城に、盧至長者という大金持ちがいました。

昔から、「降る雪と金持ちの心は積もるにつけて道を忘るる」とか申しますが、金を飽きることなく溜めるほどの人は、慳貪の心も強いようです。もちろん中には慈善の事業もしたり、布施の心を忘れないりっぱな人もおられますが、金を溜めながらそれを社会に少しも還元せず、自分の財産として蓄えることにのみ汲々としている人もいます。

この盧至長者というのが、ちょうどそういう人でした。盧至長者は、山ほどの財産がある癖に、着るものといえば破れ、垢じみた不潔なものばかり、食べる物といえど牛馬の食うようなもので、やつと飢えをしのいでいるような有り

様。そして自ら家業を営んで、せっせと働くさまは、雑役に使われる人とも変わらぬ。それほどの財産家になったら、召使い同様に働く必要はなく、楽にして人を使うだけでいいのに、この人はそうでないから世間の人に笑われていたとあります。

よく働き、ぜいたくをせず、爪に火を灯すような苦勞をして儉約し、それで金を溜めるのがどこが悪いのか、と思う人もおられるかもしれないが、やはりそういう人はいつの時代でも、「そんなに稼いでどうするの?」と軽蔑されるのではないだろうか。



さて、ある時、城中の人々が国をあげての祝いごとを迎え、家々を様々な飾りものでかざり、町中、花と香水の薫りが満ちあふれ、いたるところで酒宴を開き、歌舞音楽を交えて、大変なにぎわいを見せていました。それを盧至長者が見て、うらやましく思い、「おれも一つ、その愉快なことをして見たいものじゃ」と、早速、我が家に帰り、ひそかに蔵の戸を開け、

まるで清水の舞台から飛び降りたような気になって、五錢ほどの金を持ち出しました。今の金にしたらどうでしょう、千円か二千円くらいの額でしょうか、いざれにしても長者の財産にすれば微々たるお金です。

その時、「もし我が家で食事をするとなれば、このぐらいの金では、とても家中の者に行き渡らないだろうし、また他人の家に行つて食べることにすれば、その家主に金を奪われないものでもないから、どこか人の見えない所にいつて、こっそり食いたいのじゃ」と思い、まず二錢の金でパンを買い、また二錢で酒を買い、残る一錢で青物を買ひ、家の中にある塩をひとつまみ取り出し、それを着物の裾に包み、町の外に出て一本の樹の下に行つたところ、そこには多くの鳥や獣がいて、奪われそうになつたので、これはたまらんとおぼして場所を買え、墓地に逃げ隠れようとした所、また運の悪いことには、そこにも多くの野犬がいました。犬に噛まれては大変な思い、そこを離れて物静かな所に行き、持ってきた酒の中にシヨウガを入れ、パンと青物に塩をつけて、酒を飲み、ひとり楽しんでるのを、天上の帝釈天に見られたのです。

↓裏に続く

盧至は大いに酔って踊りだし、歌を歌ったりしているうちに、天にも昇るような気持ちになつて「おれの愉快な気持ちには、毘沙門の福神にも諸天帝釈にも優っているぞ」と言いました。それが帝釈天の怒りを買ひ、「この欲張りめ、人に隠れてこっそりと酒を飲むばかりか、おまけにワシを罵っていやがる。ひとつ懲らしめてやらねば」と、通力自在の帝釈ゆえ、身を変えて盧至のすがたとなり、本物の盧至にはわからぬよう、ひそかに彼の家に行きました。



そこで、盧至の父母妻子や召使いの者たちを集めて、「私がこれまで欲張り根性の強かったのは、いつもそばにひとりの慳貪の鬼が付きまわっていたせいだ。このために着る物も着ず、食う物も食わず、家内親族にも何も与えようとはしなかったのは、みな鬼のしわざであった。しかし今日、ある所に出かけた所、お釈迦様の弟子の羅漢に出会った。すると羅漢の申されるには、『その方には憑き物がし

われて、『一向に存じません』と答えると、羅漢様は『知らなければ教えてやろうか』と言われたので、「どうぞ教えてください」と申し上げた。そこで羅漢様は、『お前はふたりといない施し嫌い、欲張りではないかと尋ねられるので、『いかにもそうです。なんでも怪しくて、欲しくてたまりません』と白状した。すると羅漢様は『そうであるう、そのはずだ。その方には慳貪の餓鬼という妖怪が付いておる』それでびびりして、『その鬼を落とす方法がありませんか』と尋ねた所、「それは私の法力をもって呪文を誦みさえすれば、直に落ちてしまふ」と申されるので、「どうぞ落としてください」と頼んだ。そこで羅漢様は呪文を誦んでお加持されたので、即座に鬼は我が身を離れたが、この鬼は最もよく己に似ておった。ひよつとしたら、この鬼めが戻ってくるかもしれぬ。もしこの家にやって来たら、叩き出してしまえ。鬼は必ず偽つて、『わしじゃ、盧至じゃ』と言うに違いないが、決して真に受けてはならぬ。門番は、鬼がやって来たとき、おれの合図があったなら門を開ける、それまでは開くでないぞ」と申しつけました。家中の者は主人の言うことだから当然信じ、帝釈天が

変身した偽の盧至は、慳鬼の除いた祝いじゃというので、皆に大いに御馳走をし、腹一杯に食べさせた。家の者は普段飢えていたので、大喜びをして食傷するまで食べました。帝釈天はまた蔵からあらゆる財宝・衣服や飾り物を出して、家中の者また近所の者にも施したので、近隣は大騒ぎになったのです。

そうこうしているうちに、本當の盧至が酔いを覚まして、我が家の門に近づくと、家の回りで人々が歌えや踊れやの大騒ぎ、これは何事だと思つてドンドンと戸をたたき、門を開ける」と叫んでも、誰も応じる者がいない。帝釈天は「それ、憑き物の鬼が戻ってきた。追い出してしまえ」と命じ、家中の者から打ち叩かれて、ヒドイ目に遭います。



この話はもっと長く続くのですが以下、結論だけ申しますと、自分の慳貪の為に帝釈天から罰を受けた盧至は、王様に願い出て、自分こそ本當の盧至であると決めてもらおうとしますが、帝釈天がなりすました盧至もそつ

くりなため、真偽のほどが分からず、ついにお釈迦様の所に行つて、本物の盧至であることが判明し、これからは慳貪の心を捨てるように諭されたということ。改心したことで慳貪の業によつて餓鬼道に落ちることをまぬがれ、家族にも優しくなつたという話。

(出典日蓮宗葬儀・年回・行事法話集)

お金がいくらあつても、それを人の為に使おうとせず、ケチで貪欲であれば、知らず知らずうちに餓鬼を招き寄せてしまふというのには、昔からよく言われてきました。このように有り余る物や金を持ちながら、心は却つて餓鬼と変わらなくなるのを、仏教では「有財餓鬼」といいます。盧至長者が人に隠れてこっそり飲み食いしているすがたは、まさに「有財餓鬼」です。

足るを知らざれば、富めども貧し

という言葉があります。あればある、なければないで自分の外のことには振り回されて自分を見失っているのが餓鬼です。

3月は春のお彼岸で仏道修行の時期です。自らの心の足るを知る、他に施すことを心がけてみてはいかがでしょうか。